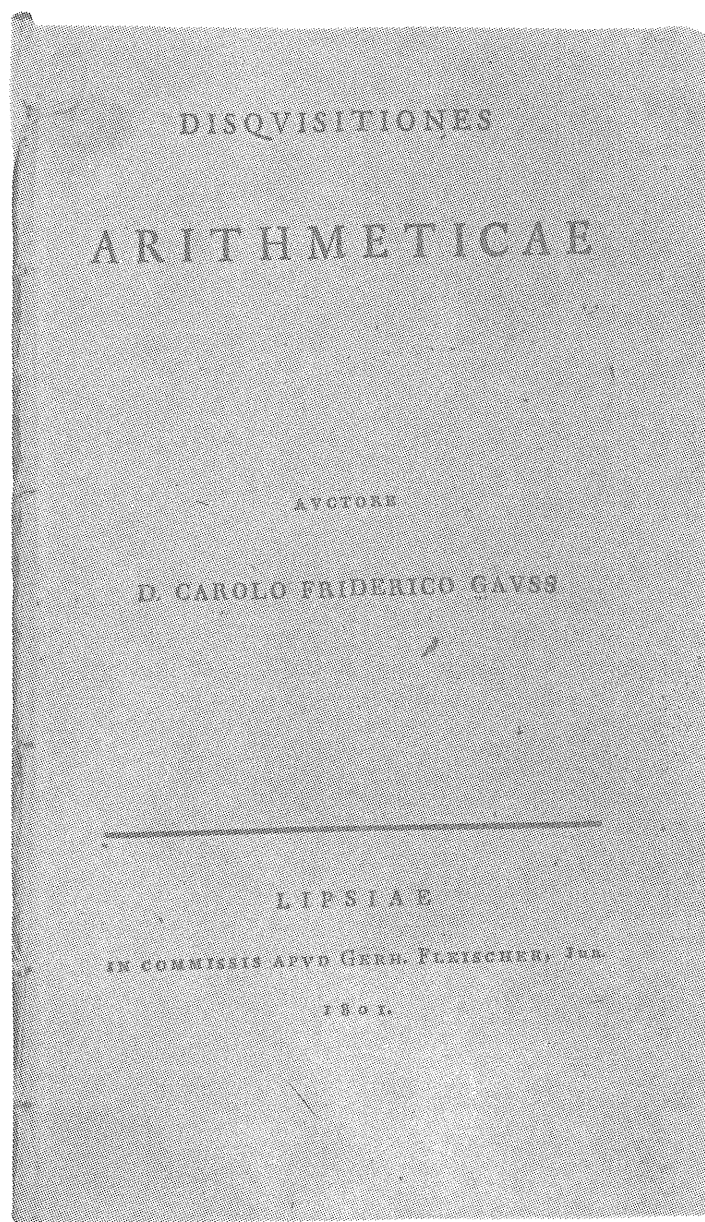


閲覧ニュース

57号

1989. 4



ガウスの著書『整数論』（Disquisitiones Arithmeticae）の初版

## 新しい教養図書館を真先に使ってほしい人

手塚 甫

北里大学創立25周年を記念して着工された教養図書館が、教養部が誕生して丁度20年を経るのと時を同じくして完成した。これまで図書館は常に教養部校舎の内の一部が宛てられていたが、これで、はじめて独立した自分の建物を持ったことになる。教養部永年の懸案であっただけに、その雄姿を現実に見るとなると、関係者であれば誰も少なからぬ感慨を覚えるはずである。その実現に力を尽して下さった人全てに、改めて感謝の念を禁じ得ない。

見ての通り、建物が新しく、広くなると共に内部も面目を一新した。これまでなかった機器も数多く導入されて機能面が充実しただけでなく、少しでも気持ちよく利用して貰うための配慮も随所に見られるはずである。

このように言われても、今年入学した1年生諸君にしてみれば、そんなこれまでの行き掛かりは自分達とは無縁と言いたい所かも知れない。が、そう言って片付ける前に少し聞いて貰いたいことがある。先輩、中でも教養部在籍中この建物の工事を横に見つづけながら、いざ使える時には教養部を去らねばならない2年生、そして3・4年生の気持ちも少しは慮ってほしいのだ。君達の先輩の中には、こんな人達もいるのである。

例えばS君。今年3年生になった人だが、本当は図書館の司書になりたいと漏らすほどの本好きだ。ミヒャエル・エンデが特にお気に入り、誰もがエンデをもてはやすずっと以前、すでに小学生の時から『モモ』の愛読者だった、と言うのがこの人の御自慢である。

北里に入学が決って一番うれしかったのは、ドイツ語を学べることだった。それと言うのも『モモ』を原書で読めるようになるからだ、とまで言う。とは言っても、北里でドイツ語だけを学ぶ訳ではない。びっしり詰った時間割の中で、ドイツ語は週に2コマだけである。1年でドイツ語文法を一通り終えるのを待ち兼ねるようにして、しかし、この人は、あの分厚い『モモ』の原書に本当に取り組み出したのである。独力でである。そして、やり出して1年でとうとうこの本を読み終えてしまった。言うまでもないことだが、これは専門の勉強の合い間を縫って、だから、学部の授業のあと、教養図書館に空席を見つけるなどしながら、寸暇を惜しんでやりとげたことである。専門の勉強は勿論ぬかりない、この人は北島賞を受けている。

次にW君。この人は典型的な努力家だ。自分は一歩づつしか前へ進めないのだと思い定め、しかし、同時に一歩づつ進むことを実行している。講義でノートを丹念にとるのは当然としても、それをもう一度、ひとつひとつ洗い直し、今度は自分の言葉で改めてノートを作り直す、そういう作業を全教科にわたって貫こうとしているのだ。勿論時間が足りないから、食事や睡眠の時間を惜しみながら、教養図書館に閉館時間まで粘ったあと、更に医学図書館に席を移して9時まで、というスケジュールを連日重ねて懸命にそのノート作りをしているのである。これは受験勉強ではない。他人を蹴落とすためにしているのではない。ただ自分はそうしないとよく理解出来

ないから、という理由だけでしているのである。だからとても充実感がある、と晴々とした顔でW君は話してくれる。

そして、H君。僕は担当している社会学で夏休み中の課題に、一定の本を読んで、それをレポートにまとめて出してもらうことにしている。北里に学ぶ諸君には、この分野は平生縁遠いこともあってか、作業がなかなか大変のようで、いいレポートもあり、悪戦苦闘の跡が窺えてよくやったと思えるものもあるが、それでもこちらが期待するのとはかなり距離があると言わざるを得ない。が、今回、ついにこちらの期待を上回るほどの立派なレポートが出て来た。それを書いたのがH君だ。本の内容を適確に理解し、論理も明解、そして何より自分の言葉でそれを表現しているのがいい。どのようにしてここまで仕上げたか、H君自身の言葉を借りよう。「私は、このような方面の本を読むのは初めてであった。又、課題にされなかったら手にすることもなかったかも知れない。(中略)こんな専門的な偏った分野を理解できるはずないと、レポートを課した先生を恨んでもみた。しかし、サッと読み通してはとても理解できないが故に、線を引き、メモしながら二度、三度と読みを重ねていくうちに、述べられていることが理解できるようになった。今まで私の頭の中に全くなかったことばかり述べられてあって、新しい脳細胞回路が出来たように思う。(中略)初めは読まされていたものの、最後には読んでいたのだから何か不思議だ。」これに蛇足を加える愚はやめる。学ぶということがどういう営みなのか、ここにまことに要領よく尽されていると思う。このような営みの場が図書館であるとすれば、新しい教養図書館は、誰よりも先に、S君、W君、H君に、頼んでも使って貰いたいと、僕は思っている。

この図書館が完成するのを待ち焦れ、ついにそれを横に見て教養部を離れていった君達の先輩の中には、こういう人達がいるのである。そう、この新しい図書館の実現には、こういう人達の思いもこめられているのだということ、1年生諸君は知っておいてほしいのである。  
(教養図書館長)

## 閲覧証の交付

教養図書館を利用するには、閲覧証が必要です。新入生の皆さんには、下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りに来て下さい。ただし、医学部は医学図書館で4月26日以降交付します。

なお、交付までの間は、学生証を使用して下さい。

|        |          |
|--------|----------|
| 衛生学部   | 4月24日(月) |
| 薬学部    | 4月25日(火) |
| 獣医畜産学部 | 4月26日(水) |
| 水産学部   | 4月27日(木) |
| 看護学部   | 4月28日(金) |



## 教養のころ

立崎 栄一

新しい図書館が完成し蔵書数も創設当時に比べて倍増しているが、肝腎の利用状況がどうなることかと心配である。何ごともそうだと思うが、外観よりも中身が大事であり、形式よりも実質が重要である。

図書館は、学習や研究のための資料や情報の提供及び、教養や娯楽としての読書によって精神生活を豊かにし、著者の心や思想にふれて、視野の広い世界観、人生観を構築する絶好の場である。

しかし乍ら、昨今は、低俗なふざけギャグや、アイドルタレントを中心とするテレビ及びアニメマンガや劇画などの視覚メディアに興味が占有されて、図書館の価値ある図書には魅力を感じず、趣味としての読書も激減傾向にあるようで、活字ばなれの世代が台頭しつつあるように感じられる。

美しい風土の中に生まれた日本語のすぐれた言語構造（豊富な表現形態、語い数及び俳句や短歌などの特異な文体、書字の芸術性など）を考えると、日本の心を感じとる機会を失った似非科学人間が殖えていくようで残念である。

「白山羊さんからお手紙ついた、黒山羊さんたら読まずに食べた、仕方がないので…」ご存知の童謡「山羊さんゆうびん」の歌詞の一節である。近頃のダイレクトメール氾濫の生活は、この山羊さんと似たような行動を人間にとらせるようになった気がする。何も手紙を食べるほど動物化が進んだというわけではないが、読まずに封も開けずにゴミ箱に入れてしまうようである。わが家でも同様

の現象がみられるようになったが、時には必要な手紙も、ワープロで宛名が書いてあったばかりに、ポイ捨ての仕打ちにあったものもあるらしい。時流にとり残された者の愚行と笑われそうだが、ハイテク時代の生活をもう一度見なおす必要があるように思う。

子供達が毎朝、所定の場所に集まってから隊列を整えて学校に向かう。小学生の集団登校の光景である。途中の、信号や歩道橋のない交差点や横断が難しい場所には、緑のおばさんや時にはおじさん（おじいさん）が居て、車の往来の合間を上手く誘導して、安全な登校を助けている。表面的には、秩序正しい規律ある行動であり、いかにも日本的なうるわしい情景にみえる。判断力の未熟な児童を危険な車から守ってやることは、非常に大切なことであり、これに毎朝、時間と労力を提供している奉仕精神は尊いものである。しかし、この毎日の行動から子供達は何を感じ、何を身につけているだろうか。班長など一部の上級生を除いて他の多くの者は、無責任にしかも盲目的に或いは全く無頓着に、羊の群の如くにひたすら列についていくだけである。安全に時間どおりに学校まで到着する目的は、完全に達成されるであろうが、子供達の状況判断力、他人への思いやりや感謝の心など、社会を正しく生きぬく基本的態度や能力を育てる絶好の機会を奪っているようで残念である。この過保護の影響が、中、高生、時には大学生の小集団の歩行態度に反映されており、他人まかせの附和雷同型で、自己中心の集団

横暴型人間が多くなりつつあるように思われる。基本的社会倫理規範に対する態度の芽を育てない日本の社会の典型である。

教養部校舎南側にある公孫樹の並木の黄葉が、昨秋（昭和63年秋）は、一際、美しく映えていたように感じられた。これは20年前に畜産学部3回生（教養部1回生）が、殆ど樹木のなかった相模原キャンパスに何か記念になるものを残そうと植えたもので、創設20周年を記念する年にふさわしい見事な風景で、彼等の成長と活躍ぶりを彷彿させるものがあり、心のなごむ楽しい秋興であった。また、教養部の鎮守ともいえる大櫨も、いつの間にか、しっかり根を張って、教養部の充実発展ぶりを象徴するかのよう、緑豊かに変貌したキャンパスの中で泰然自若たる風格をみせている。これらの樹々の四季の変化に接し、大自然の美しさ、素晴らしさを感じる心が喚起されることを期待したい。

1月8日、激動の昭和から平和の平成へと新時代の幕開けがなされたわけであるが、この時に創設20周年を記念する教養部にとっては、時宜にかなった絶好のインパクトであると思う。“平”は他との差のない平均的で平穏な状態を示しており、“成”は成就、達成、成長、成功など物事のできあがることを意味している。しかし、平凡、平（ひら）や、成り上り、成り下り、成れの果て、などあまり望ましくない状態も連想される。

新年早々の平成時代との歴史的出会いを、単に、平凡な横並び感覚ではなく、創造的英知を基盤とした個性の人間のこころを育む場を整える契機としたい。（教養部長）

## 図書館利用Q & A 〈貸出〉

Q：本を借りるには、どうしたらいいですか？

A：館外貸出は閲覧証を提出し、貸出票とブックカードに必要事項を記入し、返却日を押してもらって下さい。

図書館内では自由に閲覧できます。但し、利用が終わったら元の場所に必ず戻して下さい。

Q：何日間借りられますか？

A：貸出期間は一週間です。

洋書は二週間です。

但し、新着雑誌は午後4時から翌日の午前11時までの一夜貸しをしています。

また、期限内に読み切れなかった場合は、その本と閲覧証を持参すれば、予約がない限り延長できます。

Q：何冊借りられますか？

A：貸出冊数の制限はありません。

何冊でも御自由に。持てるだけどうぞ。

Q：借りたい本がないんですが。

A：貸出されているかもしれません。カウンターで確認して下さい。その場で予約することができます。

## 他人の言葉で

横井 洋太

子供の頃から文を書くのが苦手である。自分の言葉で、心にうかぶ事柄を表現することが下手である。喜怒哀楽が表に出やすい性格にもかかわらず、自分の感情を文章にすることがなかなか巧く出来ない。

といっても、語らないわけではない。それどころか、しばしば語り過ぎる。語りすぎる時は言葉が言葉を生むような具合になり、自分の言いたいことから表現がどんどんと離れていってしまう。その結果、思いもよらなかった新しい認識が得られるという利点もあるが、自分の感情をひとに伝えたい場合には、多くの場合、不成功におわる。だから語ることも上手ではない。

書くときには言葉がうかばず、語るときには言葉が過剰になる。これはどうも思考と表現の速度が巧く合わないためのようだ。自分の頭のなかに去来する事柄を表現するには、文を書く速度は遅すぎるようである。文字を書いているうちに頭のなかは別の事柄に移ってしまい、表現が継続していかないらしい。一方、語るときは表現の速度が優先して、思考を刺激・推進し過ぎてしまい、思考の連続性が不安定になるようである。

つまり、僕は自分の言葉で書いたり語ったりすることが苦手なのである。だからなのだろう、僕は自分の心情の表現を他人の言葉に頼ろうとする。自分の言いたかったこと、言いたいこと、言うであろうこととよく合った他人の言葉や文章や詩句に出会いたくて本を読む。そんな読書が僕には多い。

近年、斎藤 史さんの歌集（『斎藤史全歌集』大和書房）をよくひらく。

岡に来て両腕に白い帆を張れば風はさかんな海賊のうた

遠い春湖に沈みしみずからに祭りの笛を吹いて逢ひにゆく

敗北を覚悟の上につちかえば一花朱なすやわがみじかうた

このような言葉が、自分ではとても表現出来ない諸々の感情を確認させてくれる。少々、美しすぎ、格好良すぎるきらいはあるが、それも他人の言葉であるということであまり恥ずかしくない。

「賢過ぎる女も、それに愚か過ぎる女も、人生を劇のように生きられないわ。でも、それが楽しい劇だろうと哀しい劇だろうと、平凡な劇だろうと、劇のない人生に真のしあわせなんかありませんよ。そして劇は偶然に訪れたりしないわ。さあ、そろそろ準備をなさい。忘れ物はない？」（宮本 輝『ドナウの旅人』朝日新聞社）

身近の人たちが、新しい状況に身を移していくときに、何か言いたい気持ちになることがある。男女に関わらず、この魅力的な言葉が、送別の辞にぴったりの人たちが何人かい

た。こういう言葉はやはり自分では作れない。特に、最後の「忘れ物はない？」が見事である。

書くべきではない、語るべきではない心情も多くあるだろう。書いた後、語った後にそれを悔やむことがあまりに多いのだから。他人の言葉に自分の気持ちの表現を頼り、自らが語ったことではない形にするのは、心情を人に伝えたいという欲望と語るべきではないという自制とを狭く調和させる手段でもある。語るべきでないと懐くことを、他人の言葉を用いてでも語らずにいることはずいぶん努力のいることなのである。

僕が以前勤務していた大学の理学部長室にあまり大きくない書が一つかかっている。長く学部長を務めた化学の教授が、定年に際して寄贈していったものである。

#### 君看雙眼色不語似無愁

芥川龍之介の短篇『三つの窓』に出てくるこの言葉の原典について、その教授たちという詮索したことを思いだす。文学関係の人たちに尋ねてもなかなか分からなかったその原典が、白陰の「槐安國語」であることをふとしたことから知ったのは、その教授の死去の知らせを聞く半年ほど前であったろうか。語らなかったのだということを語るこの言葉を残していきなかったその人の気持ちの“若さ”に、僕は好感を持っている。

この白陰の言葉なぞは自分が拾い集める最後の「他人の言葉」の類であろう。この言葉を自分が使う言葉の一つとするだけの、書くこと語ることに對する姿勢は、自分にはなかなか出来ない。

ともあれ僕は、まだしばらくは自らの心情の動きを他人の言葉でたどるために、時折書をひらくようである。 (生物学)

### 新図書館利用にあたって

図書館に入館したら、持ち物を持ったまますぐ階段をあがって下さい。二階部分が新刊書中心の一般図書を併設した閲覧室になっています。B. D. S (Book Detection System)を導入する事により、館内では書架の本を自由に閲覧室で利用することができます。利用が終わったら、次の利用者が気持ち良く使えるように、すみやかに元の場所に戻しておいて下さい。但し、館外に持ち出す時には、必ず一階のメインカウンターで貸出手续をして下さい。この手續を怠ると、館外に出ることが出来ません。以上が、従来の利用方法と大きく異なった点です。

使いにくい点、不満な点等ありましたら、随時カウンターに申し出て下さい。館内設置の投書箱を利用して下さっても結構です。出来るだけ要望に応じていきたいと思っています。新図書館は、生まれたばかりです。良くするも悪くするも、利用者の皆さんしだいです。上手に使いこなし、皆さんの学生生活に大きく役立ててくださることを、祈っています。

## □ 表紙解説

加 藤 末 広

表紙の写真はガウスの著書『整数論』(Disquisitiones arithmeticae)の初版(1801年)のタイトル・ページ。

Karl Friedrich Gauss (1777-1855)はドイツのBraunschweigで生まれた19世紀前半を代表する数学者で、彼の研究の領域は代数学、整数論をはじめ、非ユークリッド幾何学、複素解析学、楕円関数論、更には天文学、電磁気学などまでに及んでいる。

『整数論』はガウスが24才のとき出版された彼の処女作で、この本によって整数論の系統的な研究が一挙に推し進められた。全体は7節に分かれ合同式、2次形式の理論などが展開されている。この中には例えば正17角形が定木とコンパスだけで作図できる事なども言及されている。原書はラテン語で書かれているがすぐに絶版となり、現在はYale

University Press から1966年英訳が出ている(Springer, 1986)。

ところでガウスは彼の印章に“少数なれど熟したり”(pauca sed matura)という標語

を刻んでいる。実際彼は研究の成果が完成の域に達するまでは結果を公表しようとしなかったようで、そのために彼の存命中公表されなかった重要な研究も少なくない。『整数論』も完成された芸術品とよく称されているが、逆にその完璧さ故にそれ程読み易い本とはいえないかもしれない。

ガウスは生涯数学、科学の研究に没頭し続けてきたが、ある時“どうしてそのようなりっぱな仕事ができるのか”という問に対して彼は次のように断言した：“もし他の人々が私がしたと同じように深く絶えず数学的心理に没入したならば、彼らも私の成した発見を自分達で成し遂げているでしょう。”

『整数論』を書いた後、しばらく彼は興味を天文学に移し小惑星ケレスなどの研究に向けて旅立つことになる。

(数学)

『ガロアへのレクイエム』

山下 純一著 現代数学社 1986  
(410.2/Y44 加藤 研)

## □ 編集後記

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

教養図書館では、この『閲覧ニュース』を年、数回発行しています。蔵書紹介や新着図書案内、エッセイやその時々のお知らせなど、

利用の手引として、『図書館利用案内』とあわせてご覧下さい。

今回は、手塚・立崎・横井各先生方にエッセイを、加藤先生に表紙解説をお願いしました。

閲覧ニュース 57号 1989. 4 発行

発行責任者 手 塚 甫

北里大学教養図書館

〒 228 相模原市北里1-15-1

電 話 (0427) 78-8005